

目的 明治初期から昭和前期(第2次世界大戦前まで)に到る学童の衣生活の変遷とその背景について既に6報まで報告を行った。今回は対象を既発表の地域と地理的、歴史的に異なる北九州とし、既発表の学童の服装と比較、対象しながら、その特徴、差異などをしらべた。

方法 北九州地域の100年以上の歴史をもつ都市部と漁村の小学校の、卒業写真、クラス写真、開校100年誌や古老よりの聞きとりその他によって調査を行った。

結果 ・明治、大正期の学童服としての和服は広域的なつながりをもっているが、ここでは特別な日以外は殆ど袴を着用しなかったようである。

・明治40年頃から女子の式日の服装として、美しい模様入りの長いたもとの紋付きが多く見られた。

・因島市の学童に見られた女子の黒衿が、明治期、漁村の小学校において、低学年から高学年まで多くみられた。

・女子の稚児わは漁村では浦和市同様大正末期まで見られ、ここでは特に大きくゆい上げられている。

・男子の洋服への移行は浦和市より著しく早く、昭和期に入ると共に急速に進んだ。